

Title	志賀高原雑魚川および横湯川流域に生息するニホンザルの環境利用様式の研究(III 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	斎藤, 良裕; 好廣, 眞一
Citation	霊長類研究所年報 (1981), 10: 44-44
Issue Date	1981-01-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/162933">http://hdl.handle.net/2433/162933</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

の出産期にかけて、続けて2度分裂し、Mu群、Ar群、Hi群の3群となった。本研究では、これらの新しく産まれた3群の遊動域の形成過程で、土地をめぐる群間関係がどのように変化していくのかに焦点をあてて、遊動域とterritorialityとの関係、分裂と個体群調節機構との関係など、主として生態学的要因と強い関連をもつ問題を研究課題とした。

1979年5月の出産期直後の各群れの個体数は、Mu群: 22頭; Ar群: 31頭; Hi群: 11頭で、Ko群に出来する3群の合計頭数は、64頭であった。分裂直前の1976年10月の45頭と比較すると19頭の増加がみられた。出産は、4月下旬から5月下旬までの期間観察された。3群合わせて11頭の出産が見られ、3群の平均出産率は62%で、本地域に生息する8群の平均出産率の約40%と比較するとかなり高かった。

1979年の各群れの遊動域は、Ar群: 4.4ha; Mu群: 5.4ha; Hi群: 2.4haで、北から南へそれぞれ遊動域を隣接させていた。北のAr群と南のHi群との間には、もはや遊動域の重複がみられなくなった。この2群は、新たに近隣関係を変化させつつ、もとの群れKo群の遊動域外にも遊動するようになった。1976年のKo群の生息密度は59頭/haであったが、分裂後の1979年の3群全体では61頭/haでほとんど変化はない。1978年までに観察された群れ間の出会いは、1979年では観察されなかった。

未だ遊動域の形成は終了したわけではなく、今後も緩慢な経過で、群間関係は変化してゆくだろう。激しい社会的変動後の平時の小さな群れの社会・生態学的研究が今後の課題であろう。

#### 志賀高原雑魚川および横湯川流域に生息する ニホンザルの環境利用様式の研究

斎藤 良裕  
好 廣 眞一(京大・理)

雑魚川流域に生息するニホンザルについては、1971年以来、冬期を中心に調査が行われてきたが十分ではなかった。そこで、雑魚川流域に生息するニホンザルの追跡調査を集中的に行い、植生に違いのみられる横湯川流域と雑魚川流域における

ニホンザルの土地利用法を比較するための資料を収集する目的で調査を行った。さらに、これまでの調査を顧みて、特に食痕、群れの広がり、泊り場、糞の4項目を中心に調査した。

雑魚川流域の群れの1部の個体について、個体識別を行った。それにより、群れが雑魚川中流域から下流の切明近くまでの範囲を利用していることと、横湯川流域から移動してきた個体がいることが観察された。

積雪期には、直接観察と足跡観察により、遊走路、泊り場を確認し、足跡により群れの移動時の広がりを、地形、植生などの環境の異なる条件下で測定した。

サルの摂取する食物の量的把握のため、食痕調査を行った。また、多量の糞を採集したので、糞分析を行い、その結果からも食物の量的把握を試みる。

### 設定課題 3.

#### 霊長類の生殖と成長・発達

#### 成熟オスニホンザルの血中性ステロイドホルモン濃度の年周期変動

榎 本 知 郎 (東海大・医)  
松 林 清 明 (京大・霊長研)  
大 島 清 (京大・霊長研)

ニホンザルの出産や交尾に季節性があることはよく知られている。この機序を明らかにしてゆく上で、内分泌やそれに依存するとされる精子形成の年周期変動を把握することは不可欠であろう。そこで、室内で飼育中の個体における継続的な血中ステロイド濃度及び精巣組織像の変動について検討を加えた。

〈方法〉 ニホンザルのアダルト・オス5頭を使用した。これらの個体は野外で捕獲されてから3年以上にわたって半人工照明の空調を施した部屋で個室ケージに飼育されている。ここではメスとの間に視、聴、嗅覚的接触はある。これらの個体から1979年3月から1980年4月までの14カ月間、各月下旬に3日連続5mlづつ採血した。また1979年4月を始めとして3カ月ごとに4回、精巣サイズを計測するとともに、8mm程度の精巣組織を採取した。血液サンプルは血漿を分離-30℃で凍結